



52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan
inside NEWS



● CONTENTS ●

静岡県公立大学法人	1	受賞	20
平成19年度入学式	3	客員教授の紹介	20
平成18年度卒業式	8	はばたき寄金からのお知らせ	21
教員の著書紹介	11	言語コミュニケーション研究センター紹介	22
国際交流(リール政治学院で集中講義)	12	健康支援センター紹介	22
(モスクワ国立国際関係大学留学体験記)	13	図書館だより	23
(フィリピン大学留学体験記)	15	開学記念行事	25
研究助成採択	17	グローバルCOE	27
平成19年度科学研究費補助金採択状況	17	テコンドー世界大会に出場	27
外部資金受入状況	19	ラジオ出演	27
クラブ・サークル紹介	19	寄稿募集	27

静岡県立大学は、平成19年4月から 静岡県公立大学法人が設置・運営する大学として、 新たにスタートしました。

■理事長あいさつ

静岡県公立大学法人 理事長 鈴木 雅近

【公立大学法人の発足】

静岡県立大学は、昭和62年4月に静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の県立3大学を改組統合して発足し、20年が経過いたしました。この間、学生数の減少の要因となる少子化の進行や教育研究のグローバル化の進展など、大学を取り巻く環境は大きく変化し、大学自ら、その魅力を高めていく努力がこれまで以上に求められる時代に至っております。

こうした時代の流れに的確に対応し、大学の自主的で自律的な運営体制を確立していくため、平成19年4月、地方独立行政法人法に基づき、県立大学の運営母体となる「静岡県公立大学法人」が発足いたしました。

公立大学法人の運営原則は、「自主性」、「透明性」、「公共性」、「教育研究の特性への配慮」であります。

まず、第一の「自主性」は、自主性の高い業務運営であり、二つ目の「透明性」は、業務内容の公表、三つ目の「公共性」は、公立大学としての公共の見地からの適正かつ効率的な運営、四つ目は、文字通り「教育研究の特性への配慮」による水準の高い教育研究活動の実現であります。

この制度の特色を生かした運営のため、法人では、経営部門と教育研究部門で、それぞれ理事長、学長である副理事長が責任を持って取り組んでいくこととしております。

【県民の期待に応える県立大学】

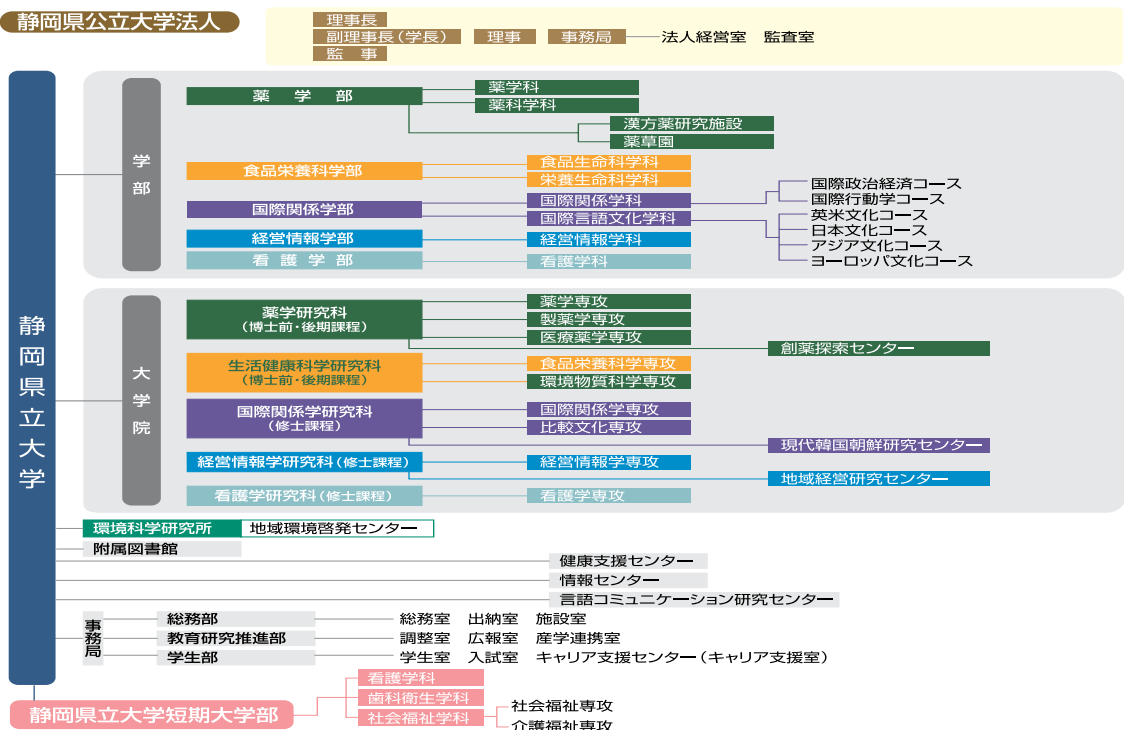
県立大学は、優れた教育研究を通じて、地域に貢献できるよう発展していくことを期待されています。これまで培ってきた伝統を基盤としつつ、さらに教育・研究の質的向上を図るとともに、幅広い教養と高い専門学力を備え、社会に貢献し広く国内外で活躍できる人材を育成することにより、国内外での評価を高め、本学の一層の発展を図ってまいります。

産業界や国・自治体等との連携をより一層進めていくために、地域社会との連携を推進する体制の整備を図るとともに、静岡県が基本理念として掲げている「富国徳 創知協働」の考え方を積極的に支援し、これまで以上に県民のニーズに適切に応えられるよう取り組んでまいります。

【目的の実現に向けて】

こうした目的の実現に向けては、「目的指向型の事業運営サイクル」つまり、計画－実行－評価－改善を行っていく必要があります。これらを着実に繰り返しながら、常に、何が目的・目標であるかを念頭に置き、学生満足度の高い教育活動など、今回の法人化が目指す目的の実現に向け、大学の教育研究の更なる発展につながるよう、法人として積極的に取り組んでまいります。

■組織図



■静岡県公立大学法人役員

(役職)	(氏名)	
理事長	鈴木 雅 近	
副理事長	西 垣 克	(学長)
理事	江 崎 善三郎	(株式会社江崎新聞店取締役社長)
理事	木 苗 直 秀	(副学長)
理事	酒 井 広	(法人事務局長)
監事	杉 山 敏 彦	(税理士：前(学)精華学園理事長)
監事	富 田 多嘉子	(静岡英和女学院中学・高校長)

■静岡県立大学部局長等 (平成19年4月1日就任)

(役職)	(氏名)	(役職)	(氏名)
学 長	西 垣 克	薬学研究科長	奥 直 人
副学長	木 苗 直 秀	生活健康科学研究科長	小 林 裕 和
事務局長	府 川 博 明	国際関係学研究科長	西 山 克 典
薬学部長	三 輪 匡 男	経営情報学研究科長(兼)	小 山 秀 夫
食品栄養科学部長	中 山 勉	看護学研究科長(兼)	木 村 正 人
国際関係学部長	八 木 公 生	環境科学研究所長	岩 堀 惠 祐
経営情報学部長	小 山 秀 夫	学生部長	出 川 雅 邦
看護学部長	木 村 正 人	附属図書館長	小 幡 壯

■教員の人事

◎採用 (4月1日付け)

板井 茂	薬学部	教授
伊藤 由彦	薬学部	助教
関 俊哲	薬学部	助教
井川 貴詞	薬学部	助教
新井 英一	食品栄養科学部	准教授
桑野 稔子	食品栄養科学部	准教授
五島 文雄	国際関係学部	教授
式守 晴子	看護学部	教授
古川 文子	看護学部	教授
日吉 孝子	看護学部	講師
山田 貴代	看護学部	助教
美濃祐紀子	看護学部	助教
酒井見名子	看護学部	助教
谷 晃	環境科学研究所	准教授

(5月1日付け)

山崎 泰広	薬学部	助教
-------	-----	----

(7月1日付け)

尾上 誠良	薬学部	講師
金子 雪子	薬学部	助教
斉藤 和巳	経営情報学部	教授

◎昇任 (4月1日付け)

糠谷 東雄	薬学部	教授
海野けい子	薬学部	准教授
左 一八	薬学部	准教授
犬塚 協太	国際関係学部	教授
栗田 和典	国際関係学部	教授
小針 進	国際関係学部	教授
湖中 真哉	国際関係学部	准教授
仁科 明	国際関係学部	准教授
野村 千文	看護学部	准教授

◎退職 (3月31日付け)

辻 邦郎		副学長
稲山 敏則		副学長
園部 尚	薬学部	教授
宮本 大誠	薬学部	講師
田邊 由幸	薬学部	助手
藤野 知美	薬学部	助手
内田 三夫	薬学部	助手
野澤 龍嗣	食品栄養科学部	教授
吹野 洋子	食品栄養科学部	助教
古旗 賢二	食品栄養科学部	助手
久留戸涼子	食品栄養科学部	助手
赤石 壽美	国際関係学部	教授
高木 桂蔵	国際関係学部	教授
川瀬 光義	経営情報学部	教授
渡部 和雄	経営情報学部	教授
小出 義夫	経営情報学部	教授
松本 敦則	経営情報学部	助手
佐藤 登美	看護学部	教授
鈴木 啓子	看護学部	教授
八木 彌生	看護学部	教授
樋口まち子	看護学部	教授
東川佐枝美	看護学部	講師
竹村ひとみ	看護学部	助手
寺尾 良保	環境科学研究所	教授
戸塚 規子	健康支援センター	教授

(4月30日付け)

野中 珠美	看護学部	助教
-------	------	----

(6月30日付け)

三田 高志	食品栄養科学部	助教
-------	---------	----

平成19年度

静岡県立大学学部・短期大学部、大学院入学式

平成19年4月4日、静岡市駿河区池田のグランシップ大ホールにおいて、静岡県立大学が静岡県公立大学法人の設置・運営となって初めての学部・短期大学部及び大学院合同の入学式が行われました。式典には、石川嘉延県知事、芦川清司県議会議長をはじめ、多数の御来賓に出席していただき、学

部・短期大学部及び大学院を合わせて1,027名の新入生及び保護者の方々に前に西垣克学長が入学式式辞を、静岡県公立大学法人を代表し鈴木雅近理事長があいさつを述べました。また、新入生を代表して、国際関係学部の池谷玲菜さんが誓いのことばを述べました。



入学式式辞

静岡県立大学 学長 西垣 克

平成19年度に静岡県立大学学部及び短期大学部並びに大学院に入学された1027名の皆様方に、県立大学全ての教職員を代表し入学されたことにお喜びを申し上げます。あわせて、本日を迎えられたことを皆さん方以上に心待ちにされ、勉学に対して物心両面から多大な支援をいただいた、ご家族をはじめとする皆様方に心からお祝いを申し上げます。

年度始めの何かとご多用なところ、本日は大学の設置母体である石川静岡県知事を初め芦川県議会議長ならびに遠藤静岡県教育長のご臨席をいただきました。さらに、国立静岡大学興学長、静岡福祉大学加藤学長をはじめ、臨床実習で大変お世話になっています静岡県立がんセンター山口総長、静岡県立総合病院神原院長、日常的に大学の運営に多大なご支援を頂いている後援会の皆様方、お

よび学生への奨学資金を提供していただいている皆様方など多くのご来賓の方々にご臨席いただき、心より篤く御礼申し上げます。



本年はこの式辞を述べさせていただくに当たり、格別の喜びが三つあります。最初は、この4月1日に県立大学は名前の前に静岡県公立大学法人が付くようになったことです。従来とは、設置形態が異なり、独立行政法人が設置する大学に変わったのです。二番目は例年にはない暖冬で、桜の開花が最初は静岡が全国一早いとされたのですが、そ

の後二転三転した結果今日の皆さん方の入学式に間に合ったことです。最後は、開花では全国最初を逃しましたが、昨日は別のもっと大きい日本一に輝いたことがありました。本日ここに、その快挙を成し遂げた高校を卒業されてこの式に参加している卒業生の方も多くいらっしゃいます。実に29年ぶりに優勝旗が静岡県にくることになったのであります。



近年にない緊迫した見ごたえのあるいい試合で、堂々とした勝利であります。彼らが出発にあたり、知事を表敬したときに優勝してきますと述べ、その通りに結果を出せたことは並々ならぬ日々の研鑽があつてのことと思います。この良き日に入学された皆さん方にはぜひ、これからの長い人生を納得の行く勝利者を目指して進んでいただきたいと願うものであります。

また、本日は昨年に続いて式典の後に社会福祉法人富岳会様による和太鼓の演奏をお願いいたしました。この施設に通う皆さん方のひたむきな鍛錬による演奏は、本日からの勉学に当たって決意を新たにしていだけるものと確信しております。

我が国の大学は、少子高齢時代の大学進学者数の減少により入学者を選択する時代から選択される時代になり、大学冬の時代の到来と言われてまいりました。この社会環境の変化に対応すべく、国立ならびに公立大学は法人化という大きな制度変革を実施してきています。県立大学もいよいよ4月1日から法人経営に移行し、県民の皆さん方が誇りに思う存在価値の高い大学めざして、様々な取り組みを計画し実行する予定です。大学の経営形態が変更しても、大学の有している本質的な機能や役割は決して変わるものではありません。従来以上に大学の本来果たすべき使命がより十分に発揮される改革でなければならないのです。

この大学改革の成果はまず学生の皆さん方に、十分に反映するものでなくてはならないと考えて

います。学生や院生の皆さん方のキャンパスライフにおけるQOLを、高い水準に保つように勉学環境の整備を進めていく予定です。本年から、国際共通語である英語能力の向上を目指して、言語コミュニケーション研究センターを全学組織として設置いたしました。海外はもとより国際的に言葉で困らない、英語で自己表現できる人材を養成していくために、アメリカのオハイオ州立大学と連携し最新の言語習得システムを導入し、留学研修も含め大学院生では国際学会におけるディスカッション能力を身につけるなど、個別能力に応じた教育システムを展開いたします。このために入学して、すぐに英語の基礎能力試験を予定しておりますので、あまり入学に浮かれることなく勉学のスタートを切っていただきたいと思ひます。

さらに、近年は働く意欲の少ない若者のいわゆるニートと呼ばれる人々の増加が大きな社会問題として報道されてきています。皆さん方は、学ぶ目標を持って入学してきていると確信していますが、まだはっきりとしていない人もいることと思ひます。そこで、本学では従来からある就職支援スタッフの仕事を大幅に拡充し、キャリア支援センターを新たに設置いたしました。このセンターは、今までのように就職相談や企業紹介という活動だけでなく、皆さん方の勉学に従ってより明確な人生設計を構築していけるように支援活動を総合的に展開するところです。そこで、就職活動は卒業する前に始めるのではなく、入学したその日から開始されるシステムとして機能するように考えています。



大学では単なる専門知識や技術などだけを学ぶのではなく、広い教養を身につけることが求められてきています。我が国の大学教育も戦後の経済成長に基づいて、それぞれの時代による変化をしてまいりました。科学と成長の時代であった20世紀が終わり、新たな世紀になり人類が解決しなけ



ればならない多くの課題が年々鮮明になってまいりました。これらの問題を適切に解決していくための能力が、必要とされ新たな国際教養を学ぶ時代になってきたのです。今日でも第二次世界大戦時の事柄が、国際社会で取り上げられ、単なる言葉による解決ではない方向性が求められてきています。大学においてそれぞれ各人が歴史観を身につけることが不可欠となってきているのです。そこで、従来否定された教養教育を再構築する試みが全国の大学で進められてきています。

県立大学では、基礎高等教育、語学教育、情報教育を大きな柱として構想する計画で、現在全学的に取り組みを進めているところです。基礎高等教育については、谷田キャンパスに隣接する県立中央図書館、県立美術館、県埋蔵文化財調査研究所と連携し、立体的な教養教育を展開する準備を進めています。この試みは、4月20日の開学記念事業で具体的に開始する予定です。ゲームをしカラオケを楽しむ人生も悪くないのですが、人生何か問題を抱えたときに、古典を紐解いたり古今の芸術作品と対峙し、歴史に思いをはせる人生も学んでいただきたいと考えているのです。



知識だけでなく人生に必要な三つの力を身につけていただくのが真の教養教育であると考えているのです。この三つの力とは、まず最初は「生きる力」です。その次は「学ぶ力」で最後に「働く力」です。その力を総合的に発揮するためには、高い人生の「志」が不可欠であろうと考えるので

す。せっかく与えられた、二つとない人生を過ごすにあたって、皆さん方一人ひとりが人生劇場の主演であってほしいのです。県立大学は静岡県をキャンパスとして県下の様々な資源を活用して学習し研究を行い、学術的ならびに学問的成果を基に、地域社会の発展に寄与できる劇場として機能することを目指しています。ぜひこの大きな劇場の中で思う存分、主演を務めていただきたいと思います。

静岡県では中国の浙江省と友好交流を始めて、本年は25周年にあたり様々な記念事業が計画されています。県立大学を始めとして県内の大学が協力をしてこの秋には、新たな大学間交流も計画され検討が進められてきています。この記念すべき年にちなんで、最後に当たり浙江省ともゆかりがあったとされる、中国で最も有名な軍師である諸葛孔明の残した言葉を皆さん方に送って式辞とさせていただきます。

諸葛孔明は、234年志半ばにして五丈原の陣中で没しましたが、人生の46歳と遅く恵まれた子供の瞻（せん）に残した「誡子」という書があります。この題名は「子を戒める書」で「それ君子の行いは、静もって身を修め、儉をもって徳を養う。澹泊にあらざれば、もって志を明らかになすなく、寧靜にあらざれば、もって遠きを致すなし。それ学はすべからく静なるべく、才はすべからく学ぶべし、学にあらざれば、もって才を広ろむるなく、志にあらざればもって学をなすなし」と残しているのです。勉学はじっくりと腰をすえて確実になし、早分かりの浅知恵ではなく学ぶべきものといっているのです。才能は学ぶことから得られるもので、志がなければ学ぶことはできないということを述べています。これからの大学での学びが皆さん方のより実り多き人生の基盤となることを願い式辞とさせていただきます。



理事長挨拶

静岡県公立大学法人 理事長 鈴木 雅近

平成19年度静岡県立大学学部・短期大学部並びに大学院の入学式にあたり、県立大学を設置・運営します静岡県公立大学法人を代表して、一言お祝いを申し上げます。

晴れの入学式を迎えられました新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

温かい愛情を持って、皆さんの成長を見守り、励ましてこられたご家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。

また、本日は、石川静岡県知事や芦川静岡県議会議長をはじめ、多くのご来賓の皆様にご出席をいただき、厚く御礼を申し上げます。

静岡県立大学は、昭和62年4月に県立3大学を統合して発足し、20年が経過いたしました。この間、学生数の減少の要因となる少子化の進行や、教育研究のグローバル化の進展など、大学を取り巻く環境は大きく変化し、大学自ら、その魅力を高めていく努力が、これまで以上に求められる時代に至っております。

こうした時代の流れに的確に対応し、大学の自主・自律的な運営体制を確立していくため、去る4月1日、地方独立行政法人法に基づき、県立大学の新たな運営母体となる静岡県公立大学法人が発足いたしました。

この法人化は、本学において、充実した教育・研究活動や学生サービス、地域貢献活動などを実施していくために導入したものであり、これまで培ってまいりました伝統を基盤としつつ、さらに教育・研究の質的な向上を図ることにより、国内外での評価を高め、本学の一層の発展を図っていくとするものであります。



現在、県立大学におきましては、自然科学や人文・社会科学の幅広い領域にわたって教育・研究活動を展開し、また、短期大学部では、福祉、看護などの専門分野の職業人の育成を図っており、

新入生の皆さんの学習意欲に十分にこたえうる、施設・設備と教育体制を備えております。

この度、発足しました静

岡県公立大学法人は、静岡県が設立団体となっているものであり、今後とも県から十分な支援をいただき、県立大学の教育研究活動が展開されることとなります。

入学された皆さんは、これから勉学に励み、自らを高めるため、研鑽を積まれることと思いますが、県立大学自らも、大学間の厳しい競争の中において優位に立つため、大学を一段と魅力あるものにしていくことを目指し、教職員一同で努力してまいります。

新入生の皆さんにとって、重要な関心事であると思いますが、大学と短期大学部それぞれにおいては、活発なクラブ・サークル活動が行われており、学園祭の催しなどもありますので、これからのキャンパスライフを充実したものにしていきたいと思っております。

皆さんには、もとより学業に専念し、本学において専門的な知識や高度な技術を習得されとともに、様々な人々との交流などを通じて、豊かな人間性と幅広い教養を身につけることを心から期待しております。

人生において、幅広い視野に立って、自己を見つめることのできる期間は、それほど多く与えられている訳ではなく、学生生活は、瞬く間に過ぎてしまうことと思っております。

公立大学法人としてのスタートの年に入学された皆さんは、県立大学の新たな歴史を築いていく一員となった訳であり、皆さんの柔軟な発想と若者らしい行動力で、夢と希望に満ちた学生生活を送ってほしいと思っております。

結びに、皆さんの大いなる健闘とご列席の皆様のご健勝を祈念申し上げまして、挨拶といたします。



誓いのことば

入学生代表 国際関係学部 国際関係学科1年 池谷 玲菜

春の光が暖かく感じられる今日のこのよき日に、私たちは憧れの静岡県立大学に入学する事ができました。本日は、私たち新入生のために、このような盛大な式を執り行っていただき、誠にありがとうございます。

また、只今は、鈴木理事長、西垣学長先生、石川静岡県知事、芦川県議会議長から温かく、心強い激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感激しております。今日の新たな気持ちをつつまでも忘れず、高い志と静岡県立大学生としての自覚を常に持ち、勉学に勤しみたいと思います。



私は、高校生のときに、オーストラリアへ12日間の海外研修に参加しました。現地で10日間ほどホームステイをして、様々な人々と触れ合いました。最初は、「英語は小さい頃から一生懸命勉強してきたし、きっと大丈夫、ちゃんと会話ができるだろう。」と、軽く考えていました。しかし、実際に人と英語で話してみても、相手の言っていることはよくわかるのに、自分の言いたいことがうまく口から出て来ず、何度ももどかしい気持ちになりました。

この海外研修を通して、私は、人とコミュニケーションをとることの大切さを痛感しました。コミュニケーションは、言語を学ぶことだけに限らず、日常生活でも必要とされることです。現代は、インターネットやEメールなど、新しい通信手段が続々と誕生し、コミュニケーションの幅は以前よりもぐっと広がりました。しかしその一方で、コミュニケーション不足が原因で、自分の子供や親を殺してしまうという悲しい事件が増えていることも事実です。コミュニケーションは、人と人が触れ合う第一歩です。私たちは、コミュニケーションについてもう一度よく考え、見直していかなければならないと思います。私は、異文化間のコミュニケーションを始めとしたこれらの様々なコミュニケーションについて深く学ぶと共に、言語

のスキルアップや多角的な視点を養うために、静岡県立大学の国際関係学部を志望しました。そして今、憧れの大学に入って勉強できる事を大変嬉しく思っています。ひとつでも多くのことを吸収し、将来は国際社会で活躍できる人間になりたいです。



さて、世界貿易センタービルが破壊された米国同時多発テロから大分月日が経ちましたが、あれから世界は幾分変わったでしょうか。多くの人々が平和を叫んでいるのに、世界は良い方向に進むどころか、ますます陰りが見えてきています。こうしている間にも世界のどこかでは紛争が起こり、たくさんの子供が食糧不足で飢え死にし、人々は憎しみ合って今を生きています。私たちは、こうした問題に目をつぶりがちで、常に自分の利益のみを追求し、それ以外は全て後回しにしてしまっています。「自分には関係ない。誰かが解決してくれる。」と思っている人々も少なくありません。しかし、世界はすでに他人任せでは片付けられないところまで傾いています。1人だけではどうすることもできない大きな問題ですが、国と国が、人と人が手を取り合って真剣に取り組んでいけば、必ず解決の糸口が見つかるはずだと信じています。

本日、入学を許可されました1,027名は、志す分野はそれぞれ違いますが、これからの社会の担い手となるため、自分を磨き、日々修養に励んでまいります。

私たちは、今日から大学生として新たな一歩を踏み出します。大学生活を実りあるものにするためにも、今自分が何をすべきかをしっかりと見据え、「なぜだろう」という探究心、「もっと知りたい」という好奇心を常に忘れないようにしたいと思います。そして、将来社会に貢献できるよう成長していきたいと望んでいます。

そのためにも、西垣学長先生を始め、諸先生方、諸先輩方の温かいアドバイス、厳しいご指導をお願いいたしますと共に、今日の決意を常に忘れず、日々精進して参りますことをここに誓います。

平成18年度

静岡県立大学学部・短期大学部卒業式、大学院学位記授与式

平成19年3月23日、静岡市駿河区池田のグランシップ大ホールにおいて、静岡県立大学の学部・短期大学部合同卒業式及び大学院学位記授与式が行われました。式典には、石川嘉延県知事、芦川清司県議会議長をはじめ、多数の御来賓に出席していただき、学部・短期大学部及び大学院を合わせて921名の卒業生及び保護者の方々に西垣克学長が式辞を述べました。



卒業式・学位記授与式式辞

静岡県立大学 学長 西垣 克

本日ここに、平成18年度の静岡県立大学学部と短期大学部卒業式並びに静岡県立大学大学院学位記授与式を執り行うにあたり、教職員を代表して式辞を述べさせていただきます。例年にもみない暖冬のおかげで桜の開花時期が二転三転しましたが、どうやら本日の卒業式にあわせてくれたように思います。桜の花に見送られての平成18年度の卒業式ならびに学位記授与式が行われることを心から喜んでおります。

この式典には、年度末の大変ご多用な中、わが大学の設置者であられる石川静岡県知事をはじめとして、芦川県議会議長様、静岡福祉大学加藤学長様、静岡文化芸術大学鈴木常務理事様、藤枝市立総合病院金丸院長様、静岡県薬剤師会齊藤会長様、名誉教授の先生方、学生に奨学金を頂いていますスルガ奨学財団澤西理事長代理様、静岡県立大学後援会伊久美会長様、短期大学部後援会安部会長様など、多くのご来賓の方々にご臨席いただき、心より篤く御礼申し上げます。

本日の式典で、県立大学の537名の学部生、短期大学部の191名の学生の皆さん方に、所定の単位を修得し卒業資格が認定された証として卒業証書をお渡しできることを本当に嬉しく思います。さらに、大学院の修士過程を修了される167名と26名の博士課程修了者の皆さん方がそれぞれの学位記を

授与されたことを心からお喜び申し上げます。

さらに本日、卒業された皆さん方の中から勉学において自己研鑽され学業が優秀と認められた、それぞれの学科皆さん方を県立大学の大きな誇りとするものであります。

卒業生や修了生の皆さん方の勉学を暖かく見守り続け、皆さん方以上にこの日が来るのを心待ちにされていた、ご両親をはじめとするご家族の皆さん方のお喜びは、いかばかりかと拝察し心からお祝いを申し上げます。

県立大学は、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学が谷田キャンパスに移転統合され20周年を向かえ昨年には盛大に式典を執り行うことができました。また、短期大学部も浜松キャンパスから小鹿キャンパスへと移転し、本年の4月から新たに独立行政法人による大学となり再出発をすることになっております。この意味で、本日は県立大学としての最後の卒業式という大きな節目の式典ということになりました。





当然のことながら、大学の設置形態が変化をしても県立大学としての伝統や果たすべき機能と役割はなんら変わるものではありません。今まで以上に魅力ある大学を目指し、県民の皆さん方から深い信頼や尊敬を受けられ誇りに思っていただけ、存在価値のある大学として発展するように全力を挙げて努力する所存であります。皆さん方にとって、卒業してよかったと長く評価される大学を目指さなければならないと思うのです。この意味で県立大学も、皆さん方と同じ新たな出発点に立たされているのです。

本日卒業ならびに修了された皆さん方には、4月から大学とはまったく異なる新しい生活が待っていることと思います。全ての皆さん方は、この新しい環境や試練に耐えるだけの体力と知力を十分に備えて旅たっていただけると確信をしております。

人は一生を送る上で三つの力を備えている必要があると思います。ひとつは「生きる力」です。二番目は「学ぶ力」で最後は「働く力」です。この三つの力を大学において十分に鍛錬して卒業していただいたでしょうか。大学の使命は社会に優れた人材を教育し、学問の真理を研究する場と考えられてきましたが、これに加えて現在ではこれらの力を総合的に学ぶ場所であって欲しいと考えています。皆さん方の印象はどうでしょうか。卒業に当たって大学での生活に対する思いは、もう少し勉強しておけばよかった、社会に出て行くのが少し不安だ、自信がないなど一人ひとり様々だと思えます。



我が国の経済状況は近年大幅に改善を見せ、戦後最も長い景気回復をしてきているといわれております。しかしながら、なかなか国民の生活実感とはうまくそぐわない面もあり、大学卒業生の就職も長く冬の時代といわれてきました。さらに、大学に席を置いていても学習意欲も少なく、卒業しても働く意志のない、いわゆるニートと呼称される人々の増加が大きな社会問題とされてきました。本年は、戦後の団塊の世代の退職時期が始まり、社会的には人材難があらゆる産業場面で社会労働問題として取り上げられ、卒業後の就職戦線は一躍売り手市場に転換したと言われていています。例年県立大学の卒業生の皆さん方は、高い就職率を維持されてきたために、このような社会環境の変化はさほど本年も影響を受けていない状況にあります。



しかしながら、人生にとってどのような職に身をおくかということは、大変重要な事柄であり十分な計画性としっかりとした能力つまり働く力を身につけることが重要なこととされています。本日卒業や修了された皆さん方は、それぞれ就職や進学また留学へと、しっかりと自分自身の人生設計をもち画的に行動されていることと思います。

いかなる社会環境の下でも、不和雷同せず確固たる知的自我を社会や新たな局面でぜひ確立させる努力を続けていっていただきたいと願うのです。大学で学んだ証は付与されている権利や身勝手とは違うこと、自由と気ままに過ごすこととは大いに異なることを認識して、卒業していただきたいのです。

19世紀のイギリスの哲学者のジョン・スチュアート・ミルは、その有名な著作「自由論」という書物の中で、「自分の生活の計画を自ら選ばず、世間又は自分の属する世間の一部に選んでもらう者は、猿のような模倣の能力以外にはいかなる能力をも必要としない。自分の計画を自ら選択するも

のこそ、彼の全ての能力を活用するのである。彼は見るためには観察力を、予知するためには推理力と判断力を、決断を下すに必要な材料を蒐集するためには活動力を、決断をくだすためには識別力を使用し、ひとたび決断を下した場合には、その考え抜いた決断を固守するために毅然たる性格と自制心とを用いなくてはならない。」



さらに続けて、「人間としての彼の比較上の価値はいかなるものであろうか。人が何をなすかということのみでなく、それをなす人がいかなる種類の人間であるかということもまた、実に重要である。それを完成し美化するためにこそ人間の一生が正しく使用さるべき、人間の処々の作品の中で、最も重要なものは、確かに人間そのものである。」とし、「人間性は、模型に従って作り上げられ、あらかじめ指定された仕事を正確にやらされる機械ではなくて、自らの生命体となしている内的諸力の傾向にしたがって、あらゆる方向に伸び広がらねばならない樹木のようなものである」と述べているのである。

この卒業式は、皆さん方のこれからの長い人生という旅立ちにあたって、ひとつの停車場を過ぎ

ていくようなものであってほしいと考えています。学んだことは日々変化し、新たな勉強が必要な時代にわれわれは生きており、生涯学習の時代とされてきています。知の探求には終着駅はないのです。今日卒業する県立大学は、大学という高等教育機関としての本質を見失うことなく、不断の努力を継続し、卒業された皆さんが生涯誇りに思う大学として、いつでも帰ってこられる知の学び舎として存続していかなければならないと考えています。

それぞれの旅立ちは、ある種の別れを意味しています。最後にあたり中国の宋の時代に活躍した詩人の蘇東坡の漢詩を皆さん方へのはなむけの言葉として述べたいと思います。蘇軾は1071年に静岡県のある友好県である浙江省の杭州市副知事に任ぜられ、任地に向かう途中で恩師の歐陽脩に会いに出かけ、別離の際に歌った詩を紹介したいと思います。本年は静岡県と浙江省と友好25周年の記念すべき年であることから、例年以上に様々な交流が計画されています。このことにちなんで選んだ漢詩です。

「近き別れは 顔を改めず 遠き別れは 涙胸を潤す 咫尺にして相みざれば 実は千里と同じ 人生離別なくんば 誰か恩恵の重きを知らん」

県立大学を卒業し離れ離れになって、友人や恩師から受けた友情や恩愛の大きさや重みを知るのであるという漢詩であります。どうぞこれからも、うちにこもることなく、世間を広く渡ってそこに新たな出会いもあり別れもあると思いますが、そのたびに様々な人の恩愛に感じながらこれからの人生を過ごしていただきたいと望んでやみません。以上で本年の卒業式に当たっての式辞といたします。



本学教員の著書紹介

(1) 『アミノ酸の機能特性』

—ライフサイエンスにおける新しい波—

建帛社 全307頁 2007年3月30日発行 定価4,600円

監修 日本栄養・食糧学会

責任編集 矢ヶ崎一三・門脇基二・舛重正一・横越英彦

(2) 『食品の生理機能評価法』

—実験系とツールの新展開を目指して—

建帛社 全197頁 2007年3月30日発行 定価3,000円

監修 日本栄養・食糧学会

責任編集 津田孝範・堀尾文彦・横越英彦

食品栄養科学部 教授 横越英彦

本書は、2006年5月に本大学で開催された第60回日本栄養・食糧学会大会の2つのシンポジウム「アミノ酸の機能特性とその新展開Part II」、及び、「食品因子の生理機能評価におけるモデル系開発の新たな潮流」の講演者を執筆陣とし、これにオーガナイザーを加えて編集されたものである。

(1) 「アミノ酸の時代」を先駆ける基礎的研究の成果と応用への展開をできるだけわかりやすく、記述するように努め、アミノ酸とからだの関係を新しい視点と手法からとらえたものである。

(2) 食品の生理機能に関する研究において有効な実験モデルや評価用ツールに関する研究開発動向をできるだけわかりやすく解説し、これらの評価法の利用・普及と新たな応用開発に役立つように編集されたものである。



『学歴汚染～日本型ディプロマミルの衝撃』

展望社 全221頁 2007年1月31日発行 定価1,500円

経営情報学部 教授 小島 茂

ディプロマミル (Diploma Mill) とは、不正な学位、称号、資格を販売したり授与したりする“似非大学”のことである。日本では最近注目され始めたが、米国では古くから問題視されてきた“学位商法”で、近年はインターネットを通じて全世界に広がっている。

米国では州によって容易に大学がつくれるという日米の教育制度の隙間を突いて規制の緩い州で会社登録し、米国に本校があるかのように見せかけながら、日本で日本人をターゲットに運営する“日本型ディプロマミル”

も増えている。その中には、ニセ科学、オカルト、新興宗教、カルト集団、暴力団などに関わりを持つディプロマミルもあり闇の部分も多い。

本書は筆者が実際に闘ったディプロマミル日本校を通じて、ディプロマミルの実態を明らかにし、その弊害や被害すなわち「学歴汚染」に対して何をなすべきか、何がなしうるかを考察したものである。



『太平洋戦争と新聞』

講談社 全440頁 2007年5月10日発行 定価1,250円

国際関係学部 教授 前坂俊之

靖国問題や歴史認識問題をめぐって未だに中国、韓国などとギクシャクしている日本。もう一度、その原因である戦争の歴史を振り返ってみようと、この本を出版しました。とくに、当時の与論形成に大きな影響力もっていた大新聞「朝日」「毎日」に焦点を絞って、日露戦争以降、満蒙の特殊権益をめぐる中国との対立から戦争の泥沼へとめり込んでいった過程や、昭和に入って満州事変、日中戦争、太平洋戦争、敗戦までの15年戦争で政府・軍部に対しどんな論陣を張り、いかに報道したのか

をくわしく解明しました。

関東軍が謀略によって引き起こした満州事変では既成事実を即容認して大々的に報道し、慰問金などの多角的な事業、社説で軍を支持する三位一体のキャンペーンが逆に言論統制への道を開き、「新聞の死んだ日」へ至る葬式となったのです。再び時代状況が似てきた現在、歴史の教訓として大いに参考になると思います。



国際交流

リール政治学院で集中講義

国際関係学部 准教授 剣持 久木

県立大学とリール政治学院が大学間交流協定を締結してまもなく3年目を迎えようとしています。すでに県立大学からは現在交換留学生の2期生が派遣されていますし、昨年11月の創立20周年記念式典に学院長のジャン＝ルイ・ティエボー先生をお招きし、学生向けの講演会を開催したことは記憶に新しいところです。その20周年記念式典の折に、こちらが逆に客員教授としての招請を受け、このほど3月12日からの一週間で合計16時間にわたる集中講義を実施してきました。私の専門はフランス現代史ですが、先方のニーズに応じて、「日本現代政治史：明治維新から現在まで」というシラバスを作成しました。ちなみに、このシラバスはリール政治学院のホームページ上に現在も掲載されています。(http://iep.univ-lille2.fr/page-enseignants/index.html)

講義実施時期をこちらの都合に合わせて頂いたのはありがたかったのですが、そのぶん開講時間帯は他の講義との重複をさけるためか早朝8時開始や夜8時までの時間帯など、かなりハードな設定になっていました。ただ、少人数セミナーという当初の予想に反して登録者40人以上、出席者も毎回30人ちかくおり、私の講義内容はともかくとして、参加者の熱気できわめて有意義な経験をさせて頂きました。8回に区切った講義では、毎回テーマを設定し、政治史、文化史、法制史、経済史、軍事史など様々な



講義風景

側面から日本現代史を講義しました。とくに最終回のテーマに設定した「歴史認識」については、私の現在の最大の関心事の一つでもありつい熱がこもってしまいましたが、参加学生の関心も極めてたかく、積極的な質疑も展開されました。

現在フランスとドイツでは、高校生向け共通歴史教科書が導入され、「歴史認識の共有」という射程が登場しています。それに比べて東アジアの状況は対照的、ということで、フランス人学生はもちろん、ドイツ人留学生さらには、アビバックという仏独共通の高校卒業資格を取得した学生などから積極的な発言がありました。ヨーロッパは、現在エラスムス留学と呼ばれる、各国の高等教育機関の間で学生の自由な行き来が制度化しています。ヨーロッパの様々な国から集まった学生が議論する光景を間のあたりにして、東アジアにも同様の制度が存在すれば、歴史認識の違いを克服することも決して夢物語ではないのでは、と感じました。

リールでの体験をもうひとつ紹介しておきましょう。今回の滞在期間は、フランス大統領選挙期間の真只中でした。リール政治学院では、自分の講義の合間の時間帯に大統領選関連の演説会が構内で開催されていたので、私も参加しました。興味深かったのは、事前に予想した支援集会のようなものとはほど遠い趣の、政治家と学生の対等の討論集会であったところです。討論好きの、いかにもフランスらしい行事でした。演説会の主役は、保守派サルコジ候補のスポークスマンで、サルコジ氏当選の暁には有力な首相候補ともいわれていたベルトラン厚生大臣（当時）でしたが、ご当人の紹介を司会の学生が皮肉たっぷりに言ったかと思えば、質疑では、左派候補支持と思われる学生からの集中砲火を浴びるという具合でした。しかもすべての質問にご当人が丁寧に応えて、ちゃんと議論が成立していました。これなどは、議論が高揚すると感情的になる日本では想像できない姿ではないでしょうか。

最後に、今回のリール滞在に際しては、県立大学からの留学生2名をはじめ、同じく交換留学生の早稲田大学、大阪外国語大学の学生には手料理をご馳走になるなど大変お世話になったことを、記して感謝しておきたいと思います。



リール政治学院



パリ市内に復活した路面電車

モスクワ国立国際関係大学留学体験記

国際関係学部 国際関係学科4年 福士 興一

【ロシアの名門大学でロシア語を学ぶ】

私は、2006年9月1日～2007年2月28日までの6ヶ月間、ロシアの首都モスクワにあるモスクワ国立国際関係大学へ交換留学しました。世界一大きな領土を持ち、国連常任理事国のひとつであるロシア。でも、その言語であるロシア語については、我が大学の第2外国語の受講者数では例年最下位を占めています。世界の中で依然大国だということに、なぜその言語を学びたいと思う人が少ないのでしょうか。実際ロシア語を勉強してきて、これだけ魅力のある言語はないと思いました。日本人は、旧ソ連で社会主義国だというイメージのせいで、言語自体をも敬遠してきたのかもしれない。



モスクワ国立国際関係大学のキャンパスにて

モスクワ国立国際関係大学は、前身が外務省直属の学校であったことから、これまでに数多くの外交官を輩出し、この大学出身の政治家も多い名門大学です。ロシア現役外務大臣が2ヶ月に1度くらい大学を訪れ講演していたのを目の当たりにし、さすがにこの大学の偉大さを実感しました。官僚や政治家を志す学生もたくさんおり、また在露日本大使館の外交官数名も研修先としてここで学んでいます。

私のような交換留学生はかなり自由に授業をとることができました。私はロシア語の授業を週4日、1日1コマ（60分）を2コマ、午前と午後に1コマずつという時間割で受講しました。クラスには自分を含めた留学生が8人。用意されたテキストに沿って基礎的な文法や会話表現などを丁寧に先生が指導してくれました。もうひとつのロシア語の授業では、映画やドキュメンタリーなどのビデオ教材を鑑賞して聴解力向上に力を入れました。それ以外にも自分が興味を持つ分野の授業を自由に取り



ロシア人の友人とモスクワのレストランで

ことができました。私は、「ロシア近代史」、「国際外交論」、「国際法」の授業をそれぞれ週1回聴講しました。とはいえ、ロシア語自体のレベルが低い私が普通の授業についていくのは困難を極めました。どの授業もかろうじて聞き取れた単語を拾っては辞書で引くという作業を繰り返すばかりでした。ロシア語の上達を助けてくれたのは、週4日の授業は当然として、テレビやラジオ、そして何より友人の存在でした。ロシア人の友達はもちろんですが、ウクライナやキルギスタン、ウズベキスタンからの留学生との親交は大いに助けになりました。さらにポーランドや英国、米国、ハンガリー、ドイツなどからの短期留学生と会話するとき、英語が共通語になることも頻繁にありました。

【他国からの留学生たちとの交流を通じて】

大学には3つ寮があります。そのうち私が入居させてもらった第2寮は他の2つの寮と違い大学の敷地内にあり、歩いて5分でキャンパスに行くことができました。ほかの2つの寮はどうやらほぼロシア人学生専門の寮らしく、私の寮には各国からの留学生が多く入居していました。幸か不幸か、ルームメートは自分と同じく6ヶ月間の短期留学で来たフランス人が3人。その甲斐あってかフランス語にまったくゆかりのなかった自分もさすがに耳だけは慣れたのでした。今年はロシアも暖冬でしたが、冬が寒いのは変わりません。



夜のライトアップされた赤の広場でフランス人ルームメイトと

しかし、寮の中は常にセントラルヒーティングで、常夏の楽園でした。毎晩のように誰かの部屋にお邪魔しては、つまらない話からまじめな話までロシア語やら英語で語り合いました。路頭でかなりの安値で売られているDVDを買っては持ち寄って映画鑑賞をするのも夜の過ごし方のひとつでした。

そんな仲間たちと休みの日はモスクワ市街に繰り出すことも頻繁でした。寮から最寄りの地下鉄の駅までは徒歩で15分ほどです。滞在4ヶ月目にさしかかった頃、地下鉄をはじめとした交通機関の値上がりがあり、ロシア経済の好況を直接肌で感じるがありました。モスクワの地下鉄は騒音がひどいという印象をもちましたが、各駅の内装には趣向をこらした壁画やモザイク画、それに歴史的偉人の像などがあちこちに配置されてあって観光名所のひとつになっています。当初は乗り換えの複雑さに戸惑いましたが、モスクワの郊外から中心街へのアクセスには一番便利な交通手段です。そこから15分ほど地下鉄に運ばれて降りた駅は、かの有名な「赤の広場」の最寄り駅。新年1月1日午前0時は、この赤の広場で迎えることができました。午前0時に打ち上げられた盛大な花火と大衆の歓声、そして絶妙なタイミングで降り出した粉雪が照明に映えるなかで、みんなで踊り明かしたことは一生の思い出になるに違いありません。



観光客でにぎわうアルバート通り

【ロシアの文化・芸術を肌で感じて】

ロシアはまさに芸術が隆盛な国です。作家ではプーシキン、トルストイ、ドストエフスキー、作曲家ではチャイコフスキー、ラフマニノフ、ショスタコービッチなどが日本でも有名だと思えます。バレエやオペラ、演劇はもちろんですが、特に私が気に入って何度も足を運んだのがオーケストラのコンサートでした。モスクワ国立音楽院の大ホ

ールで毎晩開かれるクラシックコンサートはまさに筆舌に尽くしがたいものでした。第一線で活躍するプロが演奏するコンサートが、日本で映画を見るくらいのお手頃な価格で鑑賞できるのですから行かない手はありません。また、この音楽院で学んでいる将来有望な学生が開く演奏会にいたっては無料で聞きに行けるのですから贅沢の極みです。このように、単にロシア語を学ぶだけでなく、現地の文化をここまで深く堪能できたことは最上の喜びとなりました。

【海外留学を転機に…】

私は今回の留学を通して大変多くのことを学びました。それまで一度も日本を飛び出したことがなかった若造が、しかも他の欧米諸国とは違う独特の色を持つロシアへ留学させてもらったことは大きな収穫となりました。現地ロシアの学生と他国からの留学生の向学心、独立心、野心などには学ぶところが大きかったです。ロシアは少子化、人口減少という日本と同じ悩みを抱えていますが、何かをきっかけに誰もが予想しないとんでもないパワーを発揮するような潜在性を覚えました。この点、私自身にも言えることだと実感しました。今回の留学が大きなきっかけとなり、将来につながる確かな一歩を踏み出すことができることを信じています。



ボリショイ劇場にて
バレエ鑑賞



最後に、今回の留学にあたって、様々な面でお世話になった方々に対し、感謝申し上げます。私の周りの方々の助けがなければ今回の実りある留学生活は実現しませんでした。どうもありがとうございました。

フィリピン大学留学体験記

国際関係学部 国際関係学科（平成19年3月卒） 河田 透

平成18年9月から平成19年2月末までの期間、私は、本学と交流のある国立フィリピン大学へ交換留学しました。期間中は、フィリピン大学での授業はもちろんのこと、フィリピン社会の様々な部分を自分の目で見る事ができたのが何よりの収穫でした。



世界遺産のバナウエの棚田群

【勉強熱心なフィリピン人学生～授業を通じて～】

まず、最初は10月からの2ndセメスターに備えて、寮内でタガログ語の家庭教師をお願いし、勉強を始めました。私の滞在していた寮はインターナショナル・センターと言い、約20の国籍の学生が生活していましたが、日本人学生の姿も多く目にしました。私と同じ交換留学生が、東京外大、大阪外大をはじめとし、早稲田、中央、津田塾と数多くの大学からやってきていました。レギュラー・スチューデントとマスター・コースの学生もおり、秋口に新たな交換留学生がやって来た時点で、日本人が寮内での最大コミュニティとなってしまったほどです。それぞれの学生がそれぞれの目的を持ちフィリピンに来ていましたが、海外で繋がることのできた縁もまたとても大切にしたいと思える一つの財産でした。

そして、10月からようやく待ち焦がれたセメスターが始まりました。私の受講した科目は、College of Social sciences and Philosophyの「People of the Philippines」(Anthro123)、College of Arts and Lettersの「Tagalog」(Phil14)、そしてCollege of Fine Artsの「Photography2」の3つでした。本校から同じく交換留学生として派遣された前々回の川合さん、前回の松嶋さんからのアドバイスや、寮内の先輩留学生からのアドバイスをもとに授業を選びました。フィリピン大学では普通、一つの授業が週に2回行われるので、計6コマでしたが、フィリピン人学生は8クラス（週に16コマ）を履修しています。卒業後の進路のこともあり、残念ながら受講は2月末までしかできませんでしたが、とても有意義なものでした。

フィリピンの学校教育システムは小学校が6年間、高校が4年間、大学が4年間というふうになっているので、大学1年生は16歳ということになります。フィリピンでは大学進学率が30%とも言われている中で、特に国内最高レベルのフィリピン大学で学ぶ、彼らが勉強する姿は日本人には見られない必死なもので、また彼らの議論する意欲も高いです。私自身の日本での学習状況を考えたときに、恥ずかしさを覚えました。

【旧交を温めて～県立大学への交換留学生との再会～】

半年間の滞在中、前々年度と前年度の本校への交換留学生、Ricky Sabornay君とLyndielou Egnarさんには、フィリピン滞在中ずっとお世話になりました。

Ricky君は現在、私立大学で外国人に英語を教えるクラスを受け持ちつつ、夜はフィリピン大学のロー・スクールに通っています。私が初めてフィリピンを訪れた2005年の夏と今回の滞在中、彼の実家にお邪魔させてもらい、一緒に食事もしました。すでに社会人ということもあり時間を作ることが難しかったのですが、旧交を温めることができました。



Lyndielouさんの家族と登った
キタンラッド山からの朝焼け

Lyndielouさんは卒業を控え、現在も大学での勉強を続けています。今回の滞在中は、彼女がまだ在学中ということもあり、キャンパス生活はもちろんのこと、クリスマス・バケーション中（12月中旬～1月初めまでが休講）には彼女の実家があるミンダナオ島のブキッドノン州マライバライまでお邪魔しました。キリスト教文化の強いフィリピンにおいて、ミンダナオ島はムスリムが多いことで有名ですが、彼女の家族は叔母さん一人を除いてはキリスト教徒でした。豚の丸焼きなどが添えられて盛大に祝われるクリスマスを体験させてもらいました。また、彼女の親族一行に便乗させてもらってキタンラッド山（約2,900m）の登山もしました。フィリピン全土をカバーするTVの電波塔が林立する山頂から望んだ日の出は忘れられません。

【フィリピン社会の実態に触れて～卒論調査活動を通じて～】



フィリピンの子どもは元気だ。

私が交換留学生に応募した理由の一つに卒業論文の調査がありましたが、『フィリピンに惹かれる人々、日本に惹かれる人々』という題名でなんとか仕上げることができました。あまり学術的なものと呼べる論文に仕上がったかどうか分かりませ

んが、マニラ市内での調査を行う度に、調査とは別のところで渡日経験をもつフィリピン人と出会い、話が弾んだりし、日比関係を肌で感じることができました。また、日刊マニラ新聞・副社長の水藤さんにはインタビュー以外のプライベートなところでもお世話になり、フィリピンに根を張る日本人とお付き合いすることができました。

国家レベルでの日比関係も、ASEAN会議や安倍首相のフィリピン訪問などの時期と重なったために、日本国内ではメディア内でのニュースの取捨選択によって伝えられてこないような詳細までも、現地では耳にすることができました。おかげで、新しいニュースが入ってくるたびに卒論のデータを変更する作業が続いてしまいました。

【フィリピンへの留学とは？】

本校は運良く、フィリピン語のクラスや東南アジア関連の授業を開講しています。交換留学という制度によってU.P.ディリマン校に毎年学生を派遣できていますが、これからはU.P.システム全体との提携が進むことでしょう。国際関係学部生だけではなく、理系学部生がWHOのすぐ側にある医学関連で有名なU.P.マニラ校、東南アジアにおける米の品種改良など農学関連で有名なU.P.ロスバニョス校などへ交換留学生として派遣される可能性も高まります。

滞在中、日本学生支援機構の調査員が寮にやって来たことがありました。フィリピンへの留学に関する問い合わせが増えていることから、フィリピンに滞在する日本人留学生へ話を聞きに来たのだと言いました。東南アジアで欧米への留学に比

べて安く英語を勉強できることから人気が高まっているらしいのですが、日本国内のニュースで耳にするフィリピン像に不安を持ち、問い合わせる人が多いそうです。

現在のフィリピンでは韓国人が最も多い外国人ですが、英語を必要とする韓国企業の要求に応えるために、学生・社会人を問わず多くの人々が留学しています。マニラでは経済進出と相まった韓国人の人口増加が起こり、地方のある街では、韓国人が別荘を買いあさり、街全体がコリアン・タウン化しつつあるそうです。経済的に潤うことから歓迎するフィリピン人もいますが、その反面ほとんどの韓国人が英語しか話さないの「総じて横暴」というイメージももたれており、嫌いだというフィリピン人が多いのも事実です。20年以上前に日本人男性による「買春観光」が騒がれ嫌われたのと同様に嫌われつつあります。その国のことをよく知ってその国を学ぶという姿勢を常に持ちたいと思いました。

幸いにも私の滞在した寮の日本人学生をはじめとして、多くの日本人はフィリピン語を勉強しているし、日本のアニメの知名度がとても高いことも影響し、比較的友好的なイメージをもたれていますが、もし今後英語の学習のためだけに、フィリピンという国への理解なしに日本人がずかずか



毎日ここで夕食を食べる。一食100円未満です。

と入り込むことがあれば、それは両国の将来を考えたくえで怖いことなのかもしれません。留学に際してのフィリピン語学習が必要だと思いました（程度ではなく姿勢）。

最後に、今回派遣していただいたことに対して深く感謝するとともに、フィリピン語クラスや東南アジア研究クラスを抱える本校が、今後も留学生の派遣、国立フィリピン大学からの留学生受入れの関係が続き、さらに発展することを願っております。

研究助成採択

平成19年度内閣府食品安全委員会食品健康影響評価技術研究

研究者：代表 薬学部 教授 出川雅邦
 研究分担者 環境科学研究所 教授 下位香代子
 研究分担者 薬学部 准教授 根本清光
 研究課題：「化学物質による肝肥大誘導機序の解析を基盤とした肝発がんリスク評価系の構築」

平成19年度ネスレ栄養科学会議

研究者：薬学部 准教授 海野けい子
 研究課題：「脳の老化に対し予防効果を示す化合物の探索とその機構解明」

平成19年度三島海雲記念財団研究助成

研究者：薬学部 講師 五十里 彰
 研究課題：「細胞間接着因子による電解質吸収の制御機構と生活習慣病の予防に関する研究」

平成19年度ニッスイ・研究ファンド

研究者：食品栄養科学部 准教授 熊澤茂則
 研究課題：「プロテオミクスを応用した水産食品の品質評価法に関する研究」

平成19年度飯島記念食品科学研究振興財団研究助成

研究者：食品栄養科学部 助教 石井剛志
 研究課題：「質量分析による小麦アレルゲンの新規評価法の開発」

平成19年度すかいらーくフードサイエンス研究所研究助成

研究者：代表 食品栄養科学部 助教 石井剛志
 研究分担者 食品栄養科学部 教授 中山 勉
 研究分担者 食品栄養科学部 助教 伊藤創平
 研究課題：「カテキン類の安定性に関与する血清及び食品タンパク質の探索とその機構解明」

平成19年度 科学研究費補助金採択状況

【年度別 採択件数】

年度	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
12	162	27	35	62
13	162	23	30	53
14	177	35	29	64
15	169	31	43	74
16	140	22	48	70
17	156	39	33	72
18	174	35	44	79
19	163	37	41	78

【平成19年度 部局別 採択件数】

部 局	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
薬 学 部	69	11	14	25
食品栄養科学部	39	8	8	16
国際関係学部	15	5	10	15
経営情報学部	11	4	1	5
看護学部	8	3	4	7
環境科学研究所	21	6	4	10
合 計	163	37	41	78

【平成19年度 研究種目別 採択件数】

研究種目	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
基盤研究(S)	0	0	0	0
基盤研究(A)	1	0	0	0
基盤研究(B)	18	4	5	9
基盤研究(C)	70	22	20	42
萌芽研究	24	3	2	5
若手研究(スタートアップ)	0	0	1	1
若手研究(A)	0	0	0	0
若手研究(B)	33	7	11	18
特定領域研究	17	1	1	2
研究成果公开发表(A)	0	0	1	1
合 計	163	37	41	78

平成19年度に新規採択された研究代表者及び研究課題

基盤研究 (B)

野口博司	薬学部	教授	植物ポリケチド生合成工学による分子多様性の創出
剣持久木	国際関係学部	准教授	歴史認識共有の実験～仏独共通歴史教科書の射程～
雨谷敬史	環境科学研究所	准教授	ハロゲン化多環芳香族炭化水素の発生源と発生機構に関する研究
武田厚司	薬学部	准教授	認知、ストレス感知における海馬亜鉛のユニークな応答とストレス性精神障害の予防

基盤研究 (C)

小林公子	食品栄養科学部	准教授	生活習慣病の発症に関わる食生活と遺伝要因の相互作用に関する研究
増田修一	食品栄養科学部	助教	ヒト生体内におけるアクリルアミドの毒性発現および生成に対する食品成分の影響
下位香代子	環境科学研究所	教授	化学的ストレスと社会的ストレスの発癌イニシエーションへの複合影響に関する研究
伊吹裕子	環境科学研究所	准教授	環境汚染と紫外線の複合影響が近年の皮膚癌増加に及ぼす影響－ヒストン修飾との関連性
宮田直幸	環境科学研究所	助教	鉄・マンガン酸化細菌群集による微量金属の除去機構と地下水浄化技術への応用
星野昌裕	国際関係学部	准教授	中国・韓国・北朝鮮三者関係の構造分析と研究手法の再検討
澤田敬人	国際関係学部	准教授	英文学の基礎知識の構成と習熟に関する研究
児矢野マリ	国際関係学部	准教授	国際環境法における法制度の執行過程の多様化と複雑化に関する研究
末松俊明	経営情報学部	准教授	協力ゲーム理論の現実問題への応用に関する研究
小林みどり	経営情報学部	教授	シングルパスデザインと2パスデザインの構成に関する研究
渡辺達夫	食品栄養科学部	教授	温度感受性TRP受容体を活性化する食品成分とエネルギー代謝
中山 勉	食品栄養科学部	教授	植物ポリフェノールと生体成分との分子間相互作用
岩崎邦彦	経営情報学部	准教授	中山間地域における産地および農産物のブランド構築に関する研究
赤井周司	薬学部	教授	ベンザインの反応位置制御法の開発と多置換縮合芳香環構築
斉藤真也	薬学部	准教授	気管支喘息治療におけるパラドックス解明のための基礎研究
菅谷純子	薬学部	准教授	細胞周期チェックポイントで増大する核内受容体CARの発現制御機構とその役割の解明
池田 潔	薬学部	准教授	変異を克服したバラインフルエンザ治療薬の開発研究
三輪匡男	薬学部	教授	解毒酵素発現機構に関わる転写調節因子に着目した新視点からの糖毒性発現機序の解明
小野孝彦	薬学部	教授	アンジオテンシンII受容体過剰発現による腎炎増悪機構解析
大橋典男	環境科学研究所	教授	我が国の難培養性アナプラズマ症起因細菌のゲノム部分構造解析と簡易探索ツールの開発
日吉孝子	看護学部	講師	アスベスト肺に対する常在細菌の急性増悪作用に関する研究
岡本恵里	看護学部	准教授	フィジカルアセスメント用PC教材の開発と活用及び看護技術演習による学習効果の検証

萌芽研究

小林裕和	生活健康科学研究科	教授	花粉を介して飛散しない可食を目的とした植物形質転換マーカーの開発
谷 晃	環境科学研究所	准教授	接触刺激と光質は植物のテルペン類放出モデルの新たな説明変数となるか
松田正巳	看護学部	教授	ナノテクノロジーの健康・環境影響に関する保健政策学的研究

若手研究 (B)

三好規之	食品栄養科学部	研究員	細胞傷害性オゾンによる炎症・細胞死誘発活性と食品成分による抑制機構解析
岩倉さやか	国際関係学部	講師	中世文芸における花と自己変容一世阿弥能楽論を中心に―
竹中厚雄	経営情報学部	講師	技術的多角化と国際研究開発に関する理論的・実証的研究
石井剛志	食品栄養科学部	助教	茶カテキン結合蛋白質のプロテオーム解析による生理作用発現機構の解明
脇本敏幸	薬学部	助手	天然由来の微量抗酸化活性脂質(フラン脂肪酸)の薬理作用の解明
黒羽子孝太	薬学部	助教	MHC結合性ペプチドを内封したリポソームによる粘膜免疫賦活法の研究
浅井知浩	薬学部	講師	RNAi創薬の実現に向けたsystemic delivery systemの構築

特定領域研究

丹羽康夫	生活健康科学研究科	助教	分泌経路が関わる色素体分化制御メカニズムの解明
------	-----------	----	-------------------------

継続課題の研究代表者

基盤研究 (B)	石川准(国際関係学部 教授)、川島博人(薬学部 准教授)、奥直人(薬学部 教授)、鈴木隆(薬学部 教授)、六鹿茂夫(国際関係学研究科 教授)
基盤研究 (C)	六鹿茂夫(国際関係学研究科 教授)、桑野裕子(食品栄養科学部 准教授)、大楠栄三(国際関係学部 准教授)、吉村紀子(国際関係学部 教授)、原田均(薬学部 講師)、福島健(薬学部 准教授)、石川智久(薬学部 教授)、白尾久美子(看護学部 准教授)、貝沼やす子(食品栄養科学部 教授)、木直直秀(食品栄養科学部 教授)、大島寛史(食品栄養科学部 教授)、谷幸則(環境科学研究所 助教)、阿部郁朗(薬学部 講師)、栗田和典(国際関係学部 教授)、西田公昭(看護学部 准教授)、山浦一保(経営情報学部 講師)、左一八(薬学部 准教授)、熊澤茂則(食品栄養科学部 准教授)、桑原厚和(環境科学研究所 教授)、合田敏尚(食品栄養科学部 准教授)、山田静雄(薬学部 教授)
萌芽研究	津富宏(国際関係学部 准教授)、今井康之(薬学部 教授)
若手研究 (スタートアップ)	伊藤一頼(国際関係学部 講師)
若手研究 (B)	松森奈津子(国際関係学部 講師)、五十里彰(薬学部 講師)、上村和秀(薬学部 准教授)、大門貴志(薬学部 講師)、新井英一(食品栄養科学部 准教授)、大浦健(環境科学研究所 助教)、豊岡達士(環境科学研究所 助教)、澤田潤一(薬学部 准教授)、石島美弥(食品栄養科学部 研究員)、望月和樹(食品栄養科学部 助教)、熊坂隆行(看護学部 助教)、井下裕子(看護学部 助教)
特定領域研究	川島博人(薬学部 准教授)
研究成果公开发表 (A)	西田ひろ子(国際関係学部 教授)

※課題番号順に掲載

外部資金受入状況

〈年度別受入状況〉

(単位：件、千円)

年度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
平成12年度	16	118,100					16	118,100
平成13年度	74	122,410	21	79,107	4	5,719	99	207,236
平成14年度	82	88,389	25	64,532	10	86,700	117	239,621
平成15年度	143	96,364	21	52,055	7	65,200	171	213,619
平成16年度	130	103,465	27	96,296	12	61,200	169	260,961
平成17年度	114	118,851	37	249,061	17	29,550	168	397,462
平成18年度	107	125,829	27	250,451	20	44,500	154	420,780
計	666	773,408	158	791,502	70	292,869	894	1,857,779

〈平成18年度受入状況〉

(単位：件、千円)

年度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
全学	9	26,000	3	16,180			12	42,180
薬学部	43	50,891	10	80,400	12	17,850	65	149,141
食品栄養科学部	31	30,950	4	123,400	4	20,300	39	174,650
国際関係学部	2	1,500	1	10,903			3	12,403
経営情報学部	4	6,338	3	1,050	1	4,000	8	11,388
看護学部	2	1,200	1	500	1	300	4	2,000
環境科学研究所	16	8,950	5	18,018	2	2,050	23	29,018
計	107	125,829	27	250,451	20	44,500	154	420,780

クラブ・サークル紹介

静岡学生NGOあおい

国際関係学部 国際関係学科2年 広報担当 鈴木 優花

こんにちは!「静岡学生NGOあおい」です。

私たちは、2005年の春に『静岡の学生でNGOを立ち上げよう!』という思いに、当時のJANIC(国際協力NGOセンター)の山崎さん、顧問の津富先生の手助けをいただき誕生しました。国際協力をしたい、新しいことにトライしたい!という学生たちが集まり、現在は約40名のメンバーで活動しています!

国際協力と言っても、世界には様々な問題があります。貧困問題、環境問題、人身売買など…。その中で私たちは、東南アジアの児童買春問題に取り組むことに決しました。

私たちは、「アジアの子どもたちが自らの意志と努力によって、将来の可能性を広げ、より多くの人々が、幸せを実現できる社会環境に貢献する。」という理念に沿って、しっかりと支援内容を決めています。子供たちの一生に係わることなので、無責任な支援はできないと考えています。メンバーの何人かは、現地の状況をよく知るために去年の夏にタイとカンボジアに、今年の春にタイに視察に行ってきました。今年の夏もタイとカンボジアに視察に行きます。

去年の5月、今年の7月には、「Let'sちょっとchat!」というイベントを主催し、来てくれた人たちに国際協力を身近に感じてもらうことができました。剣祭ではブースを設けたり、模擬店を出しました。メンバー同士が、とても仲が良いことも活動を続けられる理由の一つです!これからも私たち「静岡学生NGOあおい」をよろしくお祈りします。

静岡県立大学静岡学生NGOあおいブログ<http://ameblo.jp/s-ngo>



タイ視察班



ボランティアフェスティバルにて



国際協力についてのワークショップ

受賞

■環境経営学会優秀研究賞を受賞

2004年度大学院経営情報学研究科卒業の森田裕紀子さん(五島綾子研究室)は、2007年5月12日に環境経営学会優秀研究賞を受賞し、駒沢大学において45分にわたる授賞講演を行いました。この賞は若手研究者を対象としており、修士論文を基に投稿された以下の論文が評価されました。

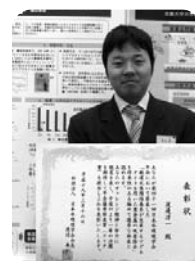
対象論文：森田裕紀子・森勇治・五島綾子著、「日本型家電リサイクルシステムの構築とその課題 —EUのWEEE指令との比較研究とリサイクルプラントのフィールドスタディを中心に—」『サステナブルマネジメント』,6,17-36 (2007)



森田裕紀子さん

■日本水環境学会年会優秀発表賞（クリタ賞）を受賞

平成19年3月16日(金)に、大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻・博士前期課程2年の渡邊淳一さん(環境工学研究室)が第41回日本水環境学会年会で優秀発表賞(クリタ賞)を受賞しました。研究テーマは「鉄還元集積培養系が生産するマグネタイトを用いた重金属の吸着除去」です。この賞は、博士前期課程(修士課程)の大学院生を対象者として、研究意欲の啓発を目指し、優秀な研究成果発表に対して表彰するものです。要旨の審査による一次選考、口頭での研究発表とポスター発表による二次選考を経て受賞者が決まります。第41回年会では、応募者166名の中から13名の受賞者が選ばれました。



渡邊淳一さん

■相馬賞の制定と第1回相馬賞の贈呈

環境科学研究所では、本学名誉教授・相馬光之先生から寄付いただいた基金をもとに、環境科学の教育研究奨励・相馬賞を制定しました。相馬賞の対象となる者は、大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻の博士前期課程の修了が見込まれる者(3名以内)です。2月8日(木)の修士論文発表会で、指導教員を除く全主任教員が、研究内容・新規性・プレゼンテーション・質疑応答の4項目について採点し、3月13日(火)開催の研究所教授会で上位得点者3名に相馬賞を贈呈することが決まりました。3月23日(金)に行われた卒業パーティーの席上で受賞者に、賞記と副賞(図書券)が研究所長から渡されました。受賞者と修士論文の題目は次の通りです。

- ・澤田恵一さん「臭素化多環芳香族炭化水素の大気環境動態に関する基礎的研究」
- ・山田建太さん「光照射過程で生じるfenthion変換生成物の分離・同定とエストロゲン作用能評価に関する研究」
- ・渡邊淳一さん「鉄還元集積培養系によるマグネタイトの生産とその金属除去への応用」

客員教授の紹介

(平成19年5月1日現在)(順不同)

井上 謙吾 (財)しずおか産業創造機構ファルマバレーセンター所長
 中村 好志 相山女学園大学生生活科学部食品栄養学科教授
 佐野 満昭 名古屋女子大学家政学部食物栄養学科教授
 張 幸 中国浙江省医学科学院院長
 陳 勇 中国浙江省医学科学院副院長
 中野 眞汎 前静岡県立大学薬学部教授
 毛 江 森 中国浙江省医学科学院名誉院長
 房家 正博 静岡県環境衛生科学研究所技術指導スタッフ
 茶山 和敏 静岡大学農学部准教授
 塚田 秀夫 浜松ホトニクス(株)中央研究所PETセンター長
 加藤 善久 徳島文理大学香川薬学部准教授
 加藤 大 東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻特任准教授
 西野 勝明 (財)静岡総合研究機構研究部長
 渡辺 豊博 (財)静岡総合研究機構研究室長
 石毛 敦 慶應義塾大学医学部漢方医学寄付講座特別研究専任講師
 坂本 光司 静岡文化芸術大学文化政策学部教授

中川 良隆 中川内科医院院長
 二宮 文乃 アオキクリニック院長
 渡邊 裕司 浜松医科大学医学部臨床薬理学教授
 川上 純一 浜松医科大学医学部教授・附属病院薬剤部長
 川森 文彦 静岡県環境衛生科学研究所主幹
 磯崎 泰介 社会福祉法人聖隷福祉事業団浜松聖隷病院腎センター長
 桐山 修八 北海道大学名誉教授
 黒田 行昭 国立遺伝学研究所名誉教授
 青木 和恵 静岡県立静岡がんセンター副看護部長
 橋野 憲親 独立行政法人工業所有権情報・研修館大学知的財産アドバイザー
 伊藤 正樹 千葉科学大学薬学部教授
 リバトガー・デッカー 米国ニュージャージー医科歯科大学教授
 ジョー・シリカ・メリカ 米国ニュージャージー医科歯科大学教授
 立道 昌幸 昭和大学医学部准教授
 鈴木 敬明 静岡県工業技術研究所主任研究員
 中山 峰治 米国オハイオ州立大学東アジア言語文学部准教授

はばたき寄金からのお知らせ

はばたき寄金運営委員会

1 平成18年度はばたき寄金事業実績

(1) 奨学金の授与

フィリピン大学短期交換留学生（派遣学生1名）とモスクワ国立国際関係大学（MGIMO）短期交換留学生（受入学生2名）に奨学支援金を授与しました。



MGIMOの短期交換留学生へ奨学支援金を授与

(2) 第10回学生文芸コンクール及び創造力啓発コンテストの実施、並びに第9回学生スピーチコンテストの開催

第10回学生文芸コンクール及び創造力啓発コンテストの作品募集を行い（8月～10月）、剣祭初日の10月28日に入選者の表彰を行いました。また、同日、第9回学生スピーチコンテストを開催し、その後、学生文芸コンクールの優秀作品及びスピーチコンテストの優秀者のスピーチをまとめた「優秀作品集」を発行しました。



優秀作品集

(3) おおとり会賞の決定

学生向けフリーペーパーを発行するなどの情報発信を行い、SOHOビジネスプランコンテストで学生部門優秀賞と静岡新聞IT賞を受賞した「院生ネット」と地域との交流を通じて、救急処置技術の普及と防災意識の向上を図るなどの積極的な取り組みを行った「防災ボランティアサークル防'z」の2団体に「おおとり会賞」を授与することを決定しました。

（なお、授与式は、平成19年4月20日の開学記念行事第4部において実施しました。）



おおとり会賞・院生ネット



おおとり会賞・防災ボランティアサークル防'z

2 平成18年度はばたき寄金収支結果

○収入計 3,939,879円

内訳 3,238,225円 前年度繰越金

700,188円 寄附金（教職員、後援会48件）

1,466円 雑収入（預貯金利息）

○支出計 997,262円

内訳 646,000円 報奨等

200,000円 事業費助成（開学記念行事等）

144,900円 印刷製本費（優秀作品集）

6,362円 雑費（賞状用紙代等）

○差引残高 2,942,617円 平成19年度に繰越

言語コミュニケーション研究センター

言語コミュニケーション研究センターは、今日のグローバル化時代の要請に対応できる英語コミュニケーション能力と日本語コミュニケーション能力の養成を目指した教育と研究を促進するために、平成19年4月1日に設置されました。

学部生の英語コミュニケーション能力をさらに向上させるために、平成18年から実施しているプレイズメントテストとアチーブメントテストを体系的に整備し習熟度別授業の量と質を充実して行く予定です。また、各学部の特性を伸ばす英語教育を視野に入れたTOEIC対策講座や英語プレゼンテーションプログラムについて考えて行きます。さらに、外国語としての日本語学習の基盤のために、効果的なシラバスと指導法について研究開発したいと思います。その実践的な試みの一つとして、「カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム」を企画し、2007年7月に4週間実施しました。この機会を通して学生間の国際交流がさらに促進されるでしょう。

研究員は、言語教育の基盤である言語学・英語学・日本語学・コミュニケーション学の専門家から構成されています。よいチームワークの下、教育言語学という新たな視点から言語教育の問題点や課題について考えていきます。



SALL
(Self-Access Language
Learning Center)
平成19年6月開所式



健康支援センター

健康支援センターは、平成17年4月に発足し、健康増進室、心の相談室、医務室という3つの部署に分かれています。内容的には、①学生および教職員の健康の保持増進、②健康科学関連の教育・研究、③地域住民（県民）の健康の保持増進、④広域非難の拠点という機能を持っています。

この中でも力を注いでいる活動は、学生さんの対人関係や学業などに関わる心の相談事業です。センター職員は学生の悩みや不安に丁寧に耳を傾け、アドバイスをし、自ら困難を乗り越える力が湧いてくるようにサポートすることをめざしています。

また、健康増進室では、自分自身の健康状態がすぐに分かるように最新式な各種の健康測定器を設置しています。その結果に関する保健指導も受けられます。さらにヨガの講座や感染症、生活習慣病など身近なテーマでの講座も行っています。

心に関する悩みや不安や心配事を持っている学生さん、そして、もっと健康的に過ごしたい学生さん、是非とも健康支援センターを気軽にご利用下さい。

活動時間と利用方法は以下の通りです。

健康増進室 活動時間：月・火・木・金 9:30～17:30（受けは17:00まで）
利用方法：直接来室
連絡先：☎264-5200 メール kenko1@u-shizuoka-ken.ac.jp

相談室 活動時間：月～木 10:00～17:00
利用方法：直接来室 または 予約 電話・メールでの相談可
連絡先：☎264-5213 メール kenko2@u-shizuoka-ken.ac.jp

医務室 活動時間：月～金 10:00～17:00
利用方法：直接来室 メンタルヘルス相談の予約は下記連絡先
連絡先：☎264-5117 メール imu@u-shizuoka-ken.ac.jp



図書館だより

図書館長に就任して

附属図書館長 小幡 壯

4月から柄にもなく、図書館長に就任いたしました。よろしくお願いたします。

法人化がスタートして、大学全体としてどのような方向性を目指していくのかを各部局とも模索しているところであろうと思います。図書館としましても、小粒ながらも特色ある図書館作りを目指して行こうと思っています。

ハード面における一般的な館内整備や事務円滑化は、利用者の側に立ってこれまで通り努力してまいります。大学図書館の存在意義は、利用者の学的要求に迅速に応えることであることは言うまでもありません。図書館のホームページや広報活動を拡充し、利用者の皆さんの意見要望を参考にして、一層利用しやすい図書館作りを目指してまいります。

さて、ソフト面におきましては、主として学生を対象にして、以下のようないくつかの合言葉をかけて、静岡ワサビのように「つ〜ん」とパンチの効いた図書館作りに励んでまいります。

1.「面白くなければ図書館じゃない！」を合言葉にして、劇場型図書館を目指します。そのためにはクールでやけに冷めている県大生に、少しはホットにそして熱くなれる場を提供しようと考えています。多くの人を引き寄せる磁場としての図書館を作るべく、現在、色々な仕掛けを考案中です。

2.「学際的でトータルな学問を追求しよう！」を合言葉その2にして、LIBERAL ARTSを学ぶための場を提供します。稀代の知の巨人、南方熊楠は大学を捨てて、図書館や博物館に籠もり、壮大で独創的な学問体系を形成しました。彼の学問の最大の特徴は、そのトータル性にあります。文系・理系は勿論

のこと、偏狭な学部教育の枠を飛び越えて、南方のように真の学問、でなくても何でもいいのですが、とにかく面白いと思うことを追及する学生を応援します。単に大学に付属する図書館ではなくて、LIBERAL ARTS のセンターとしての役割を果たす場としての図書館を目指していきます。

3.「岡村文庫・資料を活用しよう！」を合言葉その3にして、国際報道カメラマン岡村昭彦の膨大な寄贈図書や資料を使って彼が生前に追求し続けた諸テーマである、ベトナム戦争、ジャーナリズム、国際関係、環境問題、裁判闘争、生命倫理、病院改革、そして生活意識改革などをごちゃ混ぜにしながら、岡村から「何か」を学び取りましょう。

4.「知の行き詰まりを打破するフォーラムの開催！」を合言葉その4にして、大学内外から発言者を募って、知的興奮を覚醒するようなフォーラム・ディスカッションの場を開催して、大学の講義とは一味違った知の討論の場を設けます。

さて、まだまだあるのですが、ここまで勢いで書いてしまいました。読み直してみると到底実現できそうにないことが書かれているようにも思われます。しかし、果たしてそうでしょうか。とにかく、色々な呼びかけや催し物の計画案を図書館から皆さんに向けて投げかけていきます。その際、皆さんも要望やアイデアがありましたら、積極的に図書館に投げ返してください。

多くの人々がひとつのことを一緒に考えることによって、物事は先に進んで行くはずだという楽観的な希望をこめて就任の挨拶といたします。

本学教員からの著書寄贈

図書館では、平成19年4月以降に下記の図書を先生方から寄贈していただきました。

御増寄贈頂きました図書は、図書館2階自由閲覧室の教員著作コーナーに配架してありますので、是非ご利用ください。

◎湖中真哉准教授（国際関係学部国際関係学科）

『牧畜二重経済の人類学』世界思想社 2006年（請求記号 389.45/Ko71）

◎五島綾子教授（経営情報学部・同大学院経営情報学研究科）

『ブレークスルーの科学』日経BP社 2007年（請求記号 578.04/G72）

◎西田ひろ子教授（国際関係学部・同大学院国際関係学研究科）

『米国、中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦』風間書房 2007年（請求記号 336.4/N81）

統計で見る図書館の利用

平成18年度の図書館の利用統計が集計できました。数字から見てくる図書館の利用状況の一部をご紹介します。

469人、1,568人

この数字は、平成18年度の図書館の1日の平均入館者数(469人)と最高入館者数(1,568人)です。

過去5年間の推移を見てみると、入館者数、貸出冊数、貸出人数、いずれも減少していますが、平成17年度から平成18年度にかけては、入館者の減少率は過去5年間で一番低いものとなっています。また、貸出についても減少率が低くなっています。

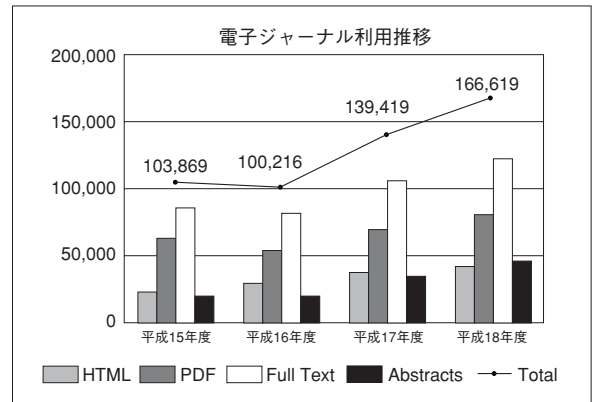
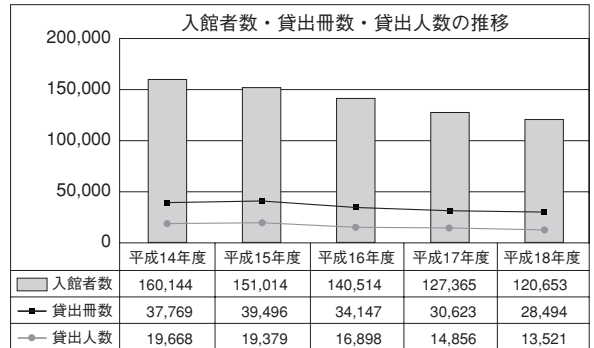
図書館で何かを調べる、読みたい本を求めて図書館に来るといふ利用の他に、図書館に来て本や雑誌を見る中で、何か調べたいことがはっきりしてくる、求めるヒントがひらめくことがたくさんあります。

図書館には33万冊の図書が、皆さんとの出会いを待っています。

166,619件

この数字は、平成18年度に図書館で購入している電子ジャーナルの利用件数です。電子ジャーナルの利用は目覚しく、なかでも全文検索や複写利用が大変増えています。過去の雑誌記事や最新の論文が、ほとんどタイムラグなくアクセスでき、図書館に来なくても学内のオンライン端末から、約7,000タイトルの電子ジャーナルを見ることができます。入館者数や貸出冊数の減少、他大学への文献複写依頼の減少傾向などは、電子ジャーナルの利用の拡大が大きく影響していると思われます。

今後ますます電子資料の利用の拡大が期待されます。

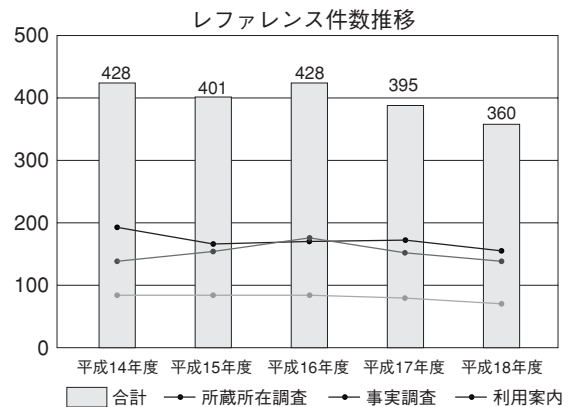
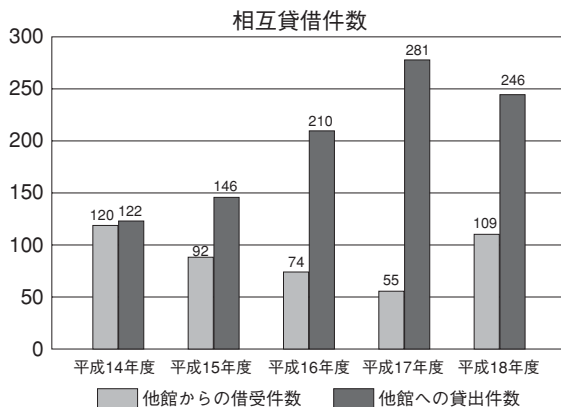


(((相互貸借 (ILL)、レファレンス・サービス)))

皆さんは、「相互貸借」(ILL: Inter Library Loan)という言葉を知っていますか。平成18年に国内では80,618点の新刊書が発行されました。限りある予算のなかで多くの資料を購入することはなかなか困難なことです。そこで、各図書館では互いに連携して、資料の貸借や複写ができるように協力しています。このような資料の相互貸借制度を略してILL(アイエルエル)といいます。県立大学に資料がないからといってあきらめないでください。図書館職員が皆さんに代わり資料を探し、取り寄せるお手伝いをします。

レファレンス・サービスとは、資料の所蔵・所在や、ある事柄についてわからない時、図書館員が本や雑誌、データベース、インターネットなどを駆使し、皆様に資料を提供したり、情報源へのアドバイスすることをいいます。

まだ利用されたことがない方も、遠慮なく図書館カウンター職員におたずねください。図書館は情報のコンシェルジュとして皆さんの学習、調査研究活動を支援しています。



SPORTS! SPEECH! SYMPOSIUM!

～平成19年度開学記念行事開催される～

今年で16回目を迎え、春の恒例行事となった開学記念行事が去る4月20日（金）に行われました。

第1部は、今年で4回目となる運動会が体育館で開催されました。今年、学部生・大学院生約130人の参加があり、学部・学年を越えた4チームに分かれ、玉入れ、借り物競争、大縄などの競技に若さをぶつけ合い、大いに盛り上がりました。



第2部は、看護学部棟13411講義室において「第10回学生スピーチコンテスト」が開催されました。例年、このスピーチコンテストは、秋の剣祭の際、開催されていましたが、今年は、初めての試みとして開学記念行事の第2部として開催されました。今回は、「県大でこんな学生生活を送りたい」をテーマに、文系・理系の双方の学部・研究科より新1年生から大学院生に至るまで総勢13名が日本語・英語で熱弁をふるい、多くの教職員・学生が熱心に耳を傾けていました。

なお、各部門の最優秀賞・優秀賞は次のとおりです。(敬称略)

【日本語・日本人学生部門】

区分	所属	氏名
最優秀賞	国際関係学部1年	加藤 志帆
優秀賞	生活健康科学研究科修士1年	中林 沙織
同	経営情報学部4年	大貫 香

【日本語・留学生部門】

区分	所属	氏名
優秀賞	経営情報学部4年	グェントアン アン
同	薬学部3年	ディンティ ホン ニュン

【英語部門】

区分	所属	氏名
最優秀賞	生活健康科学研究科修士1年	森田 美保
優秀賞	国際関係学部3年	青木 友里
同	国際関係学部3年	松浦 愛子



日本語・日本人学生部門・最優秀賞
国際関係学部1年・加藤志帆さん



英語部門・最優秀賞
生活健康科学研究科修士1年・森田美保さん

第3部は、本学の創立20周年記念事業の一環として、大講堂において「文化の丘シンポジウム～創知協働 皆でつくろう文化の丘」が開催されました。

この行事は、県立大学が位置する谷田の丘にある、県立美術館、県立中央図書館、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所と本学が相互の事業協力や地域貢献を検討するための会議である「谷田サミット」の議論の中から企画されたものです。

シンポジウムのオープニングでは、静岡市在住のチェロ奏者青嶋直樹氏と本県出身の切り絵作家福井利佐氏の切り絵のコラボレーション、引き続き本学の前教授の高木桂蔵先生による地域文化歴史語りとチェロのコラボレーションが行われました。

その後、「文化の丘への期待」をテーマとして石川県知事による特別講演が行われ、4機関の連携による文化の拠点づくりの取り組みへの評価と期待が述べられました。

さらに、本学の西垣学長がコーディネーターを務め、パネラーとしては、切り絵作家の福井利佐氏、県立美術館館長の宮治昭氏、県立中央図書館館長の天野忍氏、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所事務局次長の佐野五十三氏が参加して「創知協働 皆でつくろう文化の丘」をテーマとしてパネルディスカッションが開催されました。

パネルディスカッションでは、パネラーの文化体験や文化の丘づくりへの様々な意見交換が行われ、今後、本学を含む4機関が「文化」をテーマに連携して、相互の協力や県民との協働により、この地域を文化の創造・発信の拠点にしていくことについて、提言がなされました。

また、併催行事として小講堂内に「文化の丘4機関展示コーナー」を併設し、県立中央図書館の貴重な蔵書の紹介や埋蔵文化財の調査記録、県立美術館の紹介のほか、本学からは、国際関係学部の津富ゼミ、経営情報学部の小島ゼミ及び岩崎ゼミ、地域環境啓発センター、健康支援センターの地域貢献活動が紹介されました。

今回のシンポジウムは、多数の県民の参加を得たほか、テレビや新聞等でも取り上げられ、県立大学の地域貢献への取り組みが広くPRできたと思います。学内外の御協力で改めて感謝申し上げますとともに、今後引き続き「文化の丘」づくりへの積極的な御参加御協力をいただけますようお願い申し上げます。

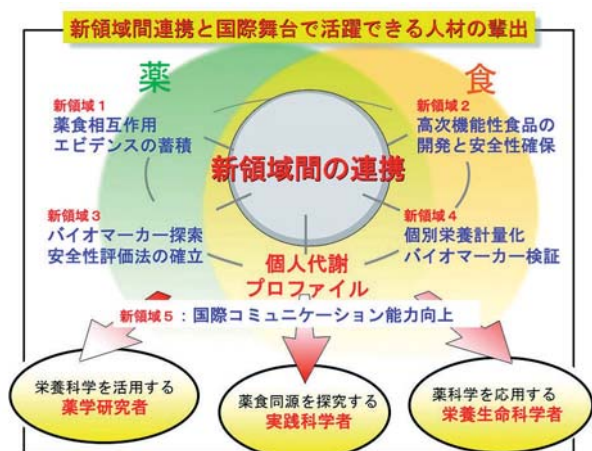
第4部の「はばたきのつどい（交流会）」では、サークル・部活動で大いに活躍した団体に与えられる「おとり会賞」の表彰式が行われ、学生向けフリーペーパー「hear」を発行するなどの情報発信を行い、SOHOビジネスプランコンテストで学生部門優秀賞と静岡新聞IT賞を受賞した「院生ネット」と地域の消防団や自治会との交流を通じて、救急処置技術の普及と防災意識の向上を図るなどの積極的な取り組みを行った「防災ボランティアサークル 防'z」の2団体が学長から表彰を受けました。また、第2部のスピーチコンテストの最優秀賞受賞者の表彰、第1部運動会の優勝チームの表彰もあわせて行われ、その後、アトラクションとして、アカペラサークル「The Vivaledge」による見事なハーモニー、「GOLD ROWDIES」によるエネルギッシュなチア・リーディング、ジャズダンス部による華麗な舞が披露され、交流会は大盛況でした。



グローバルCOEに採択される！

静岡県立大学グローバルCOE拠点リーダー 木苗直秀
(副学長・生活健康科学研究科 教授)

平成14年度にスタートした21世紀COE (Center of Excellence) プログラムの発展型と位置づけられるグローバルCOEプログラムを採択するとの吉報を文部科学省より拝受したのは、6月14日夕刻であった。「薬食同源」、「食薬融合」を合言葉に、新たに「健康長寿科学教育研究の戦略的新展開」拠点を形成し、特に食品と薬物の相互作用や、新たな疾病バイオマーカーの構築等の研究を通して、国際的に活躍できる若手研究者の育成をめざしていきたい。本事業は、生活健康科学研究科と薬学研究科との共働作業ではあるが、本学にとって電子ジャーナルシステムの継続を含めて、教職員、大学院生が連携することが必要条件でもある。西垣克学長や24人の事業推進担当者を中心として、教育・研究の輪が世界に向かって大きくなっていくことを期待している。



教育研究の海外連携

静岡県立大学 グローバルCOE拠点

米国

- ・カンサス大学 (薬食相互作用)
- ・オハイオ州立大学 (実践科学英語)
- ・ニュージャージー医科歯科大学 (アウトカムリサーチ)

オーストラリア

- ・グリフィス大学 (感染症治療薬)

タイ国

- ・コンケン大学 (薬用植物・創薬)

中国

- ・浙江省医学科学院 (漢方薬・薬膳)



～テコンドー世界大会に出場～

生活健康科学研究科博士後期課程2年の稲守朋子さんが第14回シニア世界テコンドー選手権大会に出場します。本大学名のワッペンを腕につけ、日本代表として戦います。8月1日から5日まで、イギリスで開催されますので皆さん応援しましょう。

～ラジオ出演～

本学の先生方が、「食と健康」をテーマに、皆さんが、より元気になるための情報や話題を提供していますので、是非、お聴きください。

番組名 げんきあっぷ・きれいあっぷ (SBSラジオ)

放送時間 第1・2・3水曜日 午前10時45分から

● ● ● ● ● ● ● 学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！ ● ● ● ● ● ● ●

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

教育研究推進部・広報室 (管理棟3階) へてお願いします。E-mail : koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会 (事務局 TEL 054-264-5130)
静岡県立大学ホームページアドレス : <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>